



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コンセンサス会議における円滑なコミュニケーションのための考察 : 「遺伝子組換え作物の栽培について道民が考える『コンセンサス会議』」を事例として
Author(s)	森岡, 和子; MORIOKA, Kazuko
Citation	科学技術コミュニケーション, 1, 96-104
Issue Date	2007-03
DOI	https://doi.org/10.14943/17542
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/18947
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC-96-104.pdf



報告

コンセンサス会議における円滑なコミュニケーションのための考察 ～「遺伝子組換え作物の栽培について道民が 考える『コンセンサス会議』」を事例として～

森岡 和子

Consideration for Smooth Communication in a Consensus Conference:
The Consensus Conference on Genetically Modified Organism as a Case Study

MORIOKA Kazuko

Abstract

Consensus Conference is a type of meeting that makes it possible to include ordinary people and their experiences in technology assessment. It gives people the opportunity to assess a given technological development and make up their minds about its possibilities and consequences. A citizen's panel, representative of ordinary people with divergent background, has a discussion after having taken information from experts about the technology. Having deepened discussion each other, a citizen's panel completes a final document which contains a clarification and a position of issue.

To promote discussion smoothly, a facilitator and staff members of a conference office have to work out the design of conference in detail. The author of this report took part in the Consensus Conference on Genetically Modified Organism held in Hokkaido as a staff member. This is a report that summarized what the staff members of consensus conference can prepare to make citizen's panel feel comfortable and to promote discussion smoothly. The points that should be considered are as follows: ice breaking, communication size, design of a meeting place, open/closed choice of meeting, support of making sentences, and break time.

Keywords: consensus conference, citizen's panel, facilitator, facilitation, workshop

0. 概 要

コンセンサス会議では、立場や意見が異なる市民パネルが一つの場所に集い議論を行う。初対面の市民パネルが、いきなり密度の濃い討論を行うのは難しい。会議を円滑に進めていくためには、参加者が居心地よく、意見を述べやすい場づくりが欠かせない。参加者が円滑なコミュニケーションを行うためにできる運営側の支援について、筆者が運営スタッフの一人として関わった「遺伝子組換え作物の栽培について道民が考える『コンセンサス会議』」(以下「遺伝子組換え作物コンセンサス会議」と表記)を事例としてまとめた。

1. はじめに

コンセンサス会議とは、利害が対立し、論争状態にある科学技術の特定の問題について、専門家ではない一般の人々が話し合う会議である。公募により選ばれた十数名の一般市民(市民パネル)が、争点となる科学技術について専門家からの情報提供を受けて、質疑応答などの対話を行う。その後

2007年2月6日受付 2007年2月13日受理

北海道大学大学院文学研究科 教務職員 CoSTEP2005年度修了生

連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目 北海道大学大学院文学研究科

市民パネル同士で議論を行うことで、その技術を評価し、合意を生み出す努力をする。その結果取りまとめた市民提案を公表する、社会的意思決定の一手法である。1980年以降デンマークでは、テクノロジー・アセスメントに一般市民を巻き込む様々な手法が提案され、その中でコンセンサス会議が生まれてきた。この手法を用いた会議は、デンマークをはじめヨーロッパ諸国、さらに日本やアメリカ、韓国、オーストラリアなどでも開催されてきた。

日本では、1998年に遺伝子治療、1999年にインターネット技術をテーマにコンセンサス会議が開催され、2000年には農林水産省の委託を受けた農林水産先端技術産業振興センターが「遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議」を開催した(小林2004, 158-221; 農林水産先端技術産業振興センター 2001)。その後「ヒトゲノム研究」(三井情報開発 2001)、「脳死・臓器移植」(市民参加研究会 2005)をテーマとした会議も行われている。

さまざまなコンセンサス会議が実施されるにつれて、会議の準備や運営に関する情報が蓄積されてきている。小林(2004)、科学技術への市民参加を考える会(1999)、市民参加研究会(2005)の報告には会議の企画・運営の事情が詳しい。これらの手法は、市民が協働して合意形成を作り上げていくワークショップやファシリテーションの手法が基になっている¹⁾。ワークショップやファシリテーションは、住民参加型の「まちづくり」の分野で多くの蓄積がある(石塚 2004; 森他 1996; 佐藤 1999; 渡辺・太田 2001など)²⁾。コンセンサス会議はこれを科学技術コミュニケーションの分野に応用したものであるが、まちづくりの分野に比べて事例数が少なく、今後の改善の余地がある。特に詳細設計についての情報が少なく、いわゆるノウハウ的な情報が科学技術コミュニケーションの分野の共有財産となっていない感がある。もちろん会議のテーマや、その会議特有の制約などがあり、一律にマニュアル化するのは難しいが、共有できる情報も少なくないと考える。科学技術コミュニケーション分野でこれらの情報の共有と蓄積を進め、今後さらに洗練されたコンセンサス会議を開催する一助となることを目的として本稿を執筆した。

筆者は、2006年11月から2007年2月にかけて北海道で開催された「遺伝子組換え作物コンセンサス会議」の事務局職員として準備と運営に関わった。会議の準備段階では、専門家の選定や会議の詳細設計に取り組み、本体会議ではファシリテーター補佐の役割を担当した。この経験を通じて、会議における円滑なコミュニケーションの場づくりという観点から、運営側スタッフとして個人的に気づいたこと、学んだことをこの報告にまとめた。なお、コンセンサス会議の内容の詳細や評価の報告については、2007年春を目処に、北海道の委嘱を受けて会議の企画・運営を担当した「コンセンサス会議実行委員会」によって発表されることになっている。

2. 遺伝子組換え作物を考えるコンセンサス会議について

2.1 会議の目的

北海道では2006年に「北海道遺伝子組換え作物の栽培等による交雑等の防止に関する条例」(通称: GM条例)が施行され、遺伝子組換え作物の栽培ルールやそれに伴う栽培基準を定めた。条例はできたものの、遺伝子組換え作物の栽培に関してはさまざまな意見があり、新たな技術への可能性に期待する一方で、食品としての不安を感じているという道民の実態がある(北海道農政部 2005, 13)。

北海道は、遺伝子組換え作物の栽培をテーマとして、市民参加型のリスクコミュニケーション手法であるコンセンサス会議の開催を決定した。この会議を通して、広く道民への情報提供を進めるとともに、道民意識や課題の把握に努め、GM条例施行から3年目に行われる条例の見直し検討の際に、会議で市民パネルがまとめた市民提案を参考とすることを目的としている。

2006年11月から2007年2月の期間にわたり、計4回の会議が行われた。会議の流れを図1に示す⁴⁾。

2.2 会議に関わる人々とその役割および関係

今回の会議は主催者である北海道が実行委員会に会議の企画と運営を委嘱した。実行委員会が、コンセンサス会議の主役となる市民パネル⁵⁾を公募し、居住地域、年代、性別、職業などのバランスを考慮して選考・選出を行った。さまざまな職業や立場の、幅広い年齢層(高校生から60歳代まで)の15名が、全道各地から選ばれた。実行委員会には事務局が置かれ、会議の企画・運営に必要な雑務を担当した。中立的な立場で会議の進行を担当するために、実行委員長が委員の中からファシリテーターを指名した。会議の進行は、ファシリテーターと、ファシリテーターにより事務局スタッフの中から指名された2名のファシリテーター補佐が担当した。ファシリテーターおよび事務局スタッフは、会議が公正かつ円滑に進められるように、市民パネルの作業の支援を行った。以下に、今回のコンセンサス会議でファシリテーターおよび事務局スタッフが行った支援の詳細について述べる。

3. 円滑なコミュニケーションのための技法

3.1 アイスブレイキング

アイスブレイキングはコンセンサス会議に限らず、初対面の人々が集うワークショップや集会でしばしば導入される手法である(中野 2003, 73)。いきなり本題の議論に入らず、参加者の緊張をほぐし、気軽に発言できる雰囲気づくりのために、会議の冒頭で参加者が話しやすい話題で会話をする時間を設ける。円滑な会議の滑り出しのためには有効である。コミュニケーションサイズは、1対1または数人単位で行うことが望ましい。市民パネルの顔ぶれが多様なため、会議のテーマとは関係のない、誰もが語れる日常的な話題(初回は、会場に来るまでの交通手段や朝食のメニューなど)について5分程度会話し、次の回は会議のテーマに近づく方向(会議に参加して今、どのように感じているか)へと話題をステップアップさせた。

3.2 コミュニケーションサイズ

計40時間を越える長丁場の会議であることから、各プログラムの目的にあったコミュニケーションサイズを使い分けて、効果的に議論を進めていくことが重要であった。今回の会議で行ったコミュニケーションサイズは「全体会議」、「グループ討論」、「1対1」、「個人作業」の4種類ある。

「全体会議」は、市民パネル15名+ファシリテーター (+ファシリテーター補佐)で討論を行った。専門家を交えて対話形式で質疑応答を行った場合もこれに含める。全体会議のメリットは、議論の流れを全員が同時進行で確認できることであり、そのため会議の最終的な意思決定の場となる。一方でコミュニケーションサイズが大きいと、参加者が発言するための心理的障壁が高くなる。過去の事例でも述べられている(小林 2004)が、発言する人が限定されてしまい、その人たちの意見を

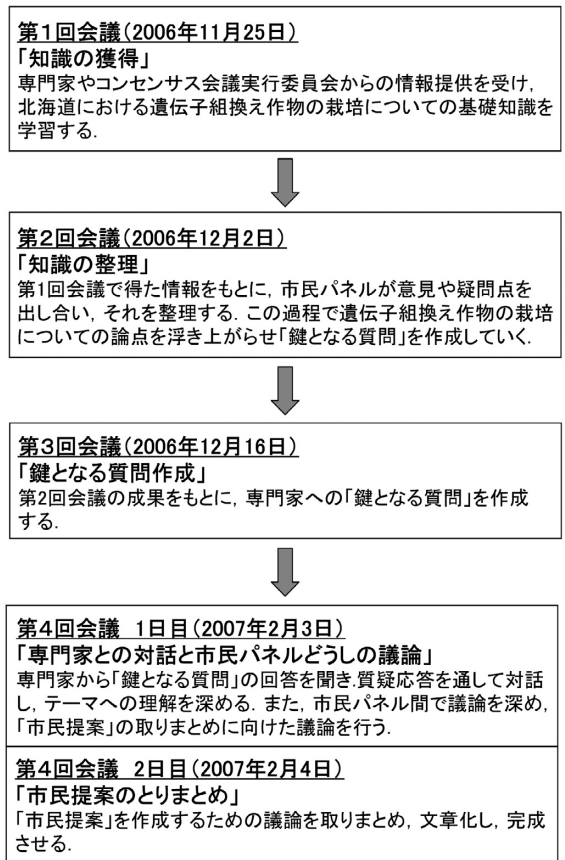


図1. コンセンサス会議の流れ

中心に議論が進みがちになる。今回ファシリテーターは、発言しない市民パネルにも気を配り、随時発言を促すことに気を配るようにしていたが、それでも発言の偏りはみられた。

「グループ討論」は、市民パネルを5人ずつ3つのグループに分け、それぞれのグループにファシリテーター（必要な場合は書記、進行記録係）がついて行われた。グループ分けは、くじ引きの場合と、年齢別五十音別名簿から順に3つのグループに分ける方法の2種類行った。どのようなグループ分けを行うにせよ、参加者にその方法を開示し公正なグループ分けであることを伝えることが、運営側と参加者との信頼関係を築くのに大切である⁶⁾。グループ討論のメリットは、少人数で討論するためグループ全員が意見を述べることができ、議論を深く掘り下げられることにある。ここで気をつけなければならないことは、議論はあくまでもグループ内のことであって、後ほど全体会議に反映させなければならないことである。出てくる意見によっては、全体会議での調整、進行が難しくなる場合もある。各グループのファシリテーターは、グループの議論の内容を全体会議の前に出し合って確認を行い、事前に全体会議の戦略を練ることが必要である。

「1対1」は前述のアイスブレイキングの際に行われた。話す相手が1人なので、コミュニケーションの心理的な障壁は低く、じっくり話すことや聞くことができる。

「個人作業」は、意見カードを書いたり、市民提案の素案を添削したりする場合に用いた。個人作業というものの全くの孤独な作業とならないように、グループ討論の中の作業という位置づけで行った。作業は個人で行いつつ、質問や意見があればすぐさまグループ内に投げかけられるような場づくりに配慮した。

3.3 作業内容と会場設計

会議の場面ごと、作業内容ごとの会場設計も円滑なコミュニケーションにとって重要な要素となる。今回は、主に4種類の会場設計を行った。

1) 講演会形式(図2-a)

専門家からの情報提供および鍵となる質問への回答については、70～80名の傍聴者を受け入れるため、一般的な講演会形式をとった。専門家からの一方向の情報伝達の場という位置づけである。市民パネルへの支援とは別に、専門家のプレゼンテーションの順序による不満(小林 2004, 250)を解消するために、追加の情報提供や追加回答の時間を設けた。

2) 対話形式(図2-b)

市民パネルが専門家と対話する場合は、近い距離でコミュニケーションができるように机を取り払い、椅子のみ、または小机つき椅子を馬蹄形に並べて場づくりを行った。机がないのでメモをとりやすいように、クリップボードを参加者に配付した。椅子のみで行う場合は、各人の後ろ側に机または椅子を置き、資料を置くスペースを設けた。上記の講演会形式では、専門家から市民パネルへの一方向のコミュニケーションとなってしまうが、ここでは近い距離で質疑応答を基本とした対話が行われ、双方向のコミュニケーションが実現できた。

3) 全体討論形式(図2-c)

市民パネル全員とファシリテーターで円形または馬蹄形、机を用いる場合は、菱形、横コの字型になるように座席を配置した。机なしで行う場合は上記対話形式と同様に、資料置き場を設けた。机を入れる場合は、なるべくコンパクトな配置を心がけた。鍵となる質問や市民提案を取りまとめる際に、プロジェクターを用いて作業中の原稿をスクリーンに映し出して作業を行ったが、すべての位置からスクリーンを見やすく座席を配置することはなかなか難しい。機材の工夫により、今後改善の余地があると考える。

4) グループ討論形式(図2-d)

グループ討論は長机4台(書記, 記録係が入る場合は5台)を合わせて一つの作業台とした。いわゆるアイランド型と呼ばれる配置である(中野 2003, 59)。傍聴者との距離を少し空けることで、グループ作業への集中を妨げないように配慮した。書記と記録係がグループ内に入る場合は、ファシリテーターはそこから離れた位置に座り、自然な形でグループワークに加わっている雰囲気を出す工夫をした。事務局側と市民パネルが、座る位置により分断される印象を与えない配慮である。

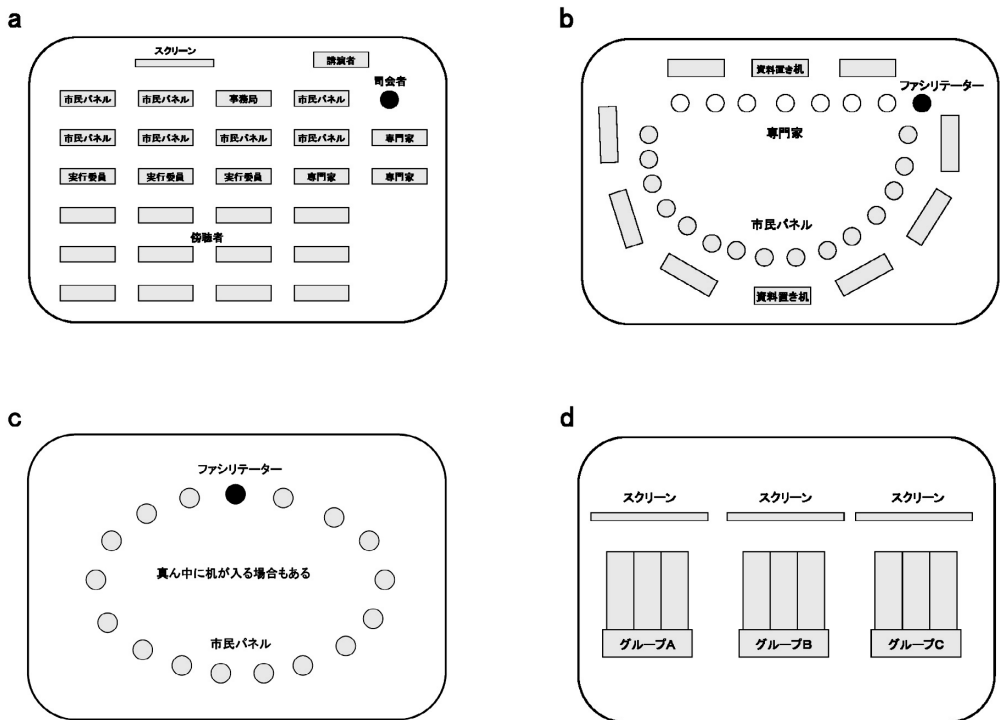


図2. 会場設計
 a: 講演会形式 b: 対話形式 c: 全体討論形式 d: グループ討論形式

3.4 公開と非公開について

コンセンサス会議という手法を広く社会に知らせるという意味や、会議のテーマが遺伝子組換え作物の栽培という関心の高い問題であることから、会議は広く公開で行われることが望ましい。また、会議の手続きの公正さを保証する意味からも公開することは必要である。一方で、市民パネルにとっては、傍聴者や報道関係者のいる中で自分の意見を述べることは大きなプレッシャーとなる。実際、第2回会議終了後、傍聴者や報道関係者から受けるストレスについて市民パネルからの苦情も寄せられた。これに対しては、第3回会議の冒頭で、事務局から傍聴者に対して傍聴マナーの徹底の依頼が行われた。メディアの取材については、実行委員長から市民パネルに対して取材への理解と協力の要請があり、その後は大きな問題にはならなかった。更なる対処ができるとすれば、事前に報道関係者と打ち合わせを行い、参加者のストレスを軽減する取材体制を求めることが考えられる。

公開する意義と、市民パネルの快適な議論を守るというジレンマを解消するために、実行委員会で検討の結果、第1回と第4回の専門家との対話の時間帯と、第2回の論点の分類と構造化ための時間

帯および第4回の市民提案を作成するため議論の時間帯を非公開にした⁷⁾。公開／非公開の議論は「脳死・臓器移植」のコンセンサス会議でも行われているが、このケースでは社会実験であることを考慮してすべて公開で行われた(市民参加研究会 2005)。今回は、市民パネルと専門家との密度の高い対話を実現させること、また心置きなく意見の発散をしてもらうために非公開にすることが望ましいとの判断だった。なお、市民提案を作成するための議論の時間帯を非公開にしたのは、夕食後の討論であったために物理的に傍聴者を受け入れられなかったという事情もある。

非公開の効果については、非公開の討論時間の方が活発に意見を述べる人もいて、議論の広がりを感ずる場面があった。会議の本来の目的である議論や討議を充実させるということを考えると、非公開の部分も後ほど公開することを保証するのであれば、一部非公開という選択は有効であると考えられる。

3.5 文章化の支援

過去に行われたコンセンサス会議では、鍵となる質問の作成および市民提案の作成は、時間との競争で行われていたことが伺える(小林 2004, 市民参加研究会 2005)。文章作りとその添削、修正という作業は本来個人作業として行われることが多いが、コンセンサス会議においては、市民パネルが全員で情報を共有して意見を述べながら、これを行わなければならない。限られた時間内で充実した議論を行い文章化するためには、議論の土台となる論点の整理ができていること、また議論の内容を迅速に文章化し、全員で共有する手法の開発が必須となる。今回、文章化のために事務局スタッフが会議の中で行った支援を図3にまとめる。

会議では、論点を出して整理するために、市民パネルが質問や意見をカード(付箋紙)に書き出していく方法を用いた。カードの分類・整理作業は、市民パネルの議論に沿って確認を取りながら、ファシリテーター補佐が担当した。市民パネルがカードに気をとられず、本来の目的である議論に集中してもらう意図からである。また、鍵となる質問の作成の段階でカードからパソコン入力に移した。「脳死・臓器移植」のコンセンサス会議でファシリテーターを務めた庄嶋によると、『グループ討論のテーマも、付箋をどう分類するかが占める割合が大きくなりました。(中略)「議論」が市民パネル同士では最後までおこなわれることなく、各自が表明した意見を分類して、専門家への「鍵となる質問」や「市民の提案」を構築していくという「作業」が、主体となってしまったように思われます』という感想を述べている(市民参加研究会 2005)。今回は、市民パネルがカードを用いた「作業」に引きずられることのないように、カード整理や、早い段階でPC入力への移行という、「議論」を促進

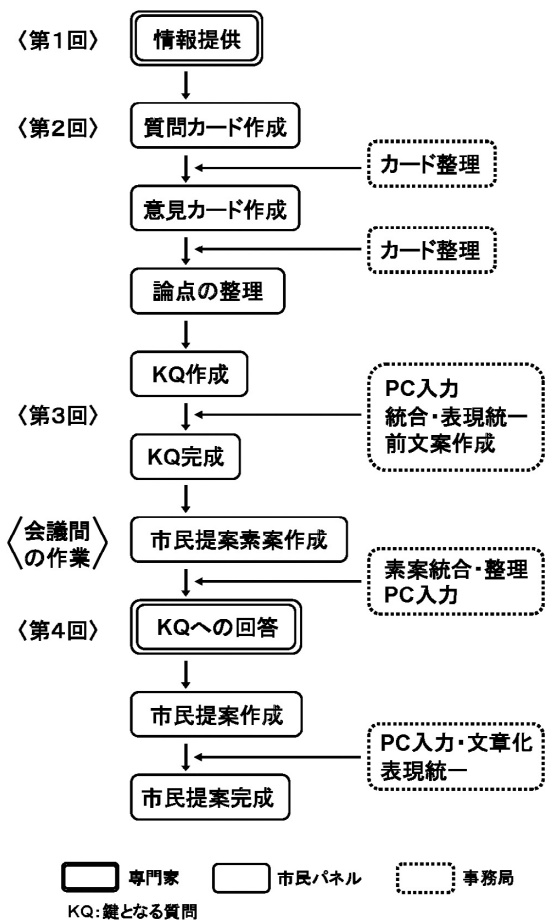


図3. 会議の流れと文章化支援

することに主眼を置いた支援を考えた。入力した内容はプロジェクターを用いてスクリーンに投影し、市民パネル間で情報を共有できるようにした。

さらに、市民パネルの文章作成の労力を減らし、議論を深めるために、以下のような支援を行った。

ひとつは、鍵となる質問作成の場合は書記が、市民提案作成の場合はファシリテーター補佐が入力および修正作業を行ったことである。市民パネルは入力された文章の修正や追加についてスクリーンを見ながら議論し、それを書記または補佐が聞き取って文案を作成し、市民パネルが再検討するという流れで行った。議論の流れに遅れることがないように、補佐は2人体制で分担しながら作業を行った。

二つ目は、ファシリテーターによる文章作成の支援である。「鍵となる質問」の前文は、ファシリテーターが市民パネルの了承のもとにひな形を作成し、それを市民パネルが検討するという手続きで行った。「市民提案」については、第3回と第4回の会議の間に、市民パネルに作成してもらった案を、ファシリテーターが組み合わせて、素案を作成した。この素案をたたき台にして、専門家からの鍵となる質問への回答の内容も盛り込んで最終的な市民提案を完成させた。文章完成後は事務局がすみやかに印刷し、文章全体を紙媒体で確認できるようにした。また、明らかな誤字・脱字、文章の乱れや表現の統一のために、最終的にファシリテーターが修正を行った。

このような文章化の支援で気をつけなければならないことは、ファシリテーターが議論の流れを誘導しないことである。今回は、ファシリテーター補佐が文章化するたびに、市民パネルへの確認を行ったこと、ファシリテーターによる素案づくりが行われた場合は、市民パネルが確認と修正を行う時間を十分に設けたことで、不適切な誘導を防ぐように配慮した。

以上のような文章化の支援を行い、市民パネルには会議と会議の間に作業を行ってもらったことで、時間の節約ができ、議論を深める効果があったと考えられる。それでも、最終的に市民提案をまとめるには、約1時間会議を延長しなければならなかった。時間との闘いは、コンセンサス会議の宿命なのかもしれないが、今後更なる設計や手法の工夫で改善できる余地があると思われる。

3.6 休憩時間

休憩時間についてはまとまった休憩を1回とるより、短時間の休憩を数回に分けてとってほしいという要望が市民パネルからあった。慣れない会議形式や作業への緊張感から、参加者の疲労が大きいと考え、作業の区切りごとに短時間の休憩を複数回入れることにした。休憩時間には、市民パネル同士でインフォーマルなディスカッションを行っている様子が見られた。機械的に時間を決めて休憩を入れるのではなく、会議の流れの中でメリハリをつけて短時間の効果的な休憩をとることが望ましい。

食事は、市民パネル専用別室が設けられた。ファシリテーターが介在しないフリーディスカッションが行われていたようだ。休憩後、または食後の会議では、それまでやや膠着気味だった議論が一気に進展し、方向性が見えることがあった。休憩することによるリフレッシュ効果とともに、市民パネル同士の自由な意見交換が一定の効果を生み出したと思われる。

第4回会議では会議中、唯一の夕食時間が設けられた。この夕食については、道農政部のボランティアの方が調理したカレーライスを、市民パネルだけでなく専門家、実行委員、事務局スタッフも交えて大部屋で会食した。関係者が一堂に会して和やかな雰囲気の中で食事をする中で、会話を進み役割を超えた連帯感を感じた。食事の準備をしたスタッフが引き上げるときに、関係者全員から拍手が起こったのが印象的であった。食事といえども、会議を円滑にすすめるための重要なツールとして活用できる可能性を感じた。

4. ま と め

以上、今回の遺伝子組換え作物コンセンサス会議で得られた、円滑なコミュニケーション促進のための運営側の支援についてまとめた。これらはワークショップやファシリテーションの手法に基づいたものでありながら、コンセンサス会議特有の事情でこそ活かせるものもある。過去に行われたコンセンサス会議の報告を参考に、今回新たに試みた円滑なコミュニケーションのための技法は、総じて意図していたものに近い成果をあげることができた。しかし、進行方法や場の設計などを初めとして、まだ改善の余地が残っている部分もある。今後さらなるコンセンサス会議の実践の積み重ねとともに、科学技術コミュニケーション分野での情報の共有と蓄積が進むことを願っている。

謝 辞

コンセンサス会議に関わる機会と、この報告を執筆する機会を与えてくださいました北海道大学科学技術コミュニケーション養成ユニットに感謝いたします。

また、準備や会議期間中に、さまざまなご助言やご指導をいただきましたコンセンサス会議実行委員および事務局スタッフの皆さまに感謝いたします。

注

- 1) ワークショップやファシリテーションの手法については、堀(2004)、中野(2001, 2003)に詳しい。
- 2) ここにあげた例はほんの一部で、住民参加によるまちづくりには多くの合意形成の事例がある。合意形成にはさまざまな手法が用いられていて、そのうちの一つがワークショップの手法である。
- 3) 会議のプログラムについては、コンセンサス会議実行委員会による『道民委員のためのガイドブック 遺伝子組換え作物コンセンサス会議』に詳しい。
- 4) 会議の詳細および「市民提案」はコンセンサス会議のウェブページ (URL: <http://gm-c.jp>) にて公開されている。市民提案は2007年3月に開催される第3回北海道食の安全・安心委員会にて公表され、審議される。
- 5) 今回のコンセンサス会議では市民パネルという役割は、北海道知事から委嘱を受けた「道民委員(市民パネル)」という名称で呼ばれていた。この報告では、混乱を避けるために道民委員という名称は使わず、すべて市民パネルという言葉に統一した。
- 6) グループ分けに限らず、コンセンサス会議のような参加と合意形成を行うリスク・コミュニケーションの場では「手続きの公正さ」と「発言の機会の保証」が大切である(吉川 2000, 176)。
- 7) 非公開で行われた部分も、会議の内容はコンセンサス会議のウェブページにて会議終了後に公開される。 <http://gm-c.jp>

●文献：

- 北海道農政部食の安全推進室食品政策課食品安全グループ 2005：『北海道食の安全・安心条例』北海道
堀公俊 2004：『ファシリテーション入門』日本経済新聞社
石塚雅明 2004：『参加の「場」をデザインする－まちづくりの合意形成・壁への挑戦』
科学技術への市民参加を考える会 1999：『コンセンサス会議実践マニュアル』
小林傳司 2002：『公共のための科学技術』玉川大学出版部, 7章, 158-221
小林傳司 2004：『誰が科学技術について考えるのか コンセンサス会議という実験』名古屋大学出版会
コンセンサス会議実行委員会 2006：『道民委員のためのガイドブック 遺伝子組換え作物コンセンサス会議』北海道
三井情報開発 2001：『生命倫理にかかわる諸問題に関する研究開発動向および社会的合意形成に関する調査』
森巖夫・猪爪範子・岡崎昌之・宮口侗廸・西村幸夫 1996：『地域づくり読本－理論と実践』ぎょうせい

中野民夫 2003：『ファシリテーション革命』岩波書店

中野民夫 2001：『ワークショップー新しい学びと創造の場』岩波書店

農林水産先端技術産業振興センター 2001：『遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議報告書』

佐藤滋 1999：『まちづくりの科学』鹿島出版会

市民参加研究会 2005：『科学技術への市民参加型手法の開発と社会実験ーイベント「市民が考える脳死・臓器移植」を中心にー』

吉川肇子 2000：『リスクとつきあう』有斐閣

渡辺俊一・太田守幸 2001：『市民版まちづくりプラン実践ガイド』学芸出版社

本稿は、科学技術振興調整費 新興分野人材養成プログラム「科学技術コミュニケーション養成ユニット」における活動成果の一部である。